●第五回派遣僧入選論文

「21世紀の仏教と私の役割」
――ユーロ・ブディズムの形成――

愛知学院大学文学部宗教学科講師　引田弘道

昭和六四年四月より一ヶ年、筆者は愛知学院大学海外研究の好機に恵まれることになった。現時点では、イギリス、オックスフォード大学にて、学問の研鑽をする予定でいる。従来の筆者の専門とする領域はインド学である故、当大学に於いても、この領域の専門家である、Richard Gombrich教授、Sanjukta Gupta Gombrich博士、Sanders氏などに師事する予定である。インド独立以来、イギリスに於けるインド学は漸々に退歩しているとはいうものの、輝かしい伝統は、膨大な写本の集積並びに、PTSの活動により、絶ゆることなく連綿と続いている。

このような学問分野に於けるインド学、仏教学の蓄積は、必然的に、仏教を個人的体験のものとして経験的に受けとめようという風潮に展開していった。数年前、オックスフォード大学で研究された、駒沢大学片山一良教授によると、

同大学内には、Oxford University Buddhist Society という名の協会があり、学内関係者のみならず、学外関係者も自由に参加して、活動の輪をひろげているらしい。その活動内容は次のものである。

Samatha meditation classes
Meetings ー Buddhism and Resolving Stress
The Way of Mindfulness
Buddha nature : How it relates to Meditation.
Zen Practices

これらの活動の内容は、南方の上座仏教、日本の禅、チベット仏教が主であるとされる。この傾向は、また当大学内の協会ばかりではなく、ヨーロッパ全体についても言えることが、最近前田恵学博士によって報じられた。博士は五十七年の夏、イギリス、ドイツ、フランス三国を歴訪され、各地で実践されている仏教の形態をつぶさに調査され、今やヨーロッパには、「ヨーロッパ人の、ヨーロッパ人による、ヨーロッパ人のための仏教」が根付き、確実な成長をみせていると報ぜられた。その報告は、前田恵学「ヨーロッパ仏教の成立-Eurobuddhisme - Eurobuddhism-Eurobuddhismus」(『愛知学院大学人間文化研究所紀要　人間文化』創刊号1～19頁)に詳しく掲載された。博士は『ヨーロッパ仏教史』なるものが今後書かれるとするならば、第一章は「ヨーロッパへの仏教の伝来」、第二章は「ヨーロッパにおける仏教学の発展」、そして第三章は「Eurobuddhism　の成立」となるであろうと、予測されている。確かにこの順序は、中国仏教や日本仏教の歴史的潮流と符号するものであり、ある意味で得心のいくものである。

では、さきに述べた、南方上座仏教、日本の禅、チベット仏教のどれが、「ヨーロッパ仏教」

としての発展の基台となっていくのであろうか、あるいはこれら三つの仏教が混然と一体化して基台となるのであろうか、という素朴な疑問が生じる。これらの仏教に共通することは

一、独身主義であること
一、瞑想を重視すること
一、自己の心を主眼として、自己以外の絶対的他者を立てないこと

キリスト教という恩寵型の宗教に満足しない

彼らが、これらの共通点をもつ瞑想型の仏教に興味を抱いたのは当然であるが、では、三者の仏教のうち、どのスタイルに統一されるのか、現在のところそれは確定していない。教義的にも、あるいは文化的にも異なるこれらの仏教のうち、どれが一番ヨーロッパ人の好みに合うのか大変興味のあるところである。筆者はかねがね、仏教とはなにも一部のエリート僧の集団から成立するのではない、という考えの持ち主である。原始仏教以来、仏教を構成するのは、出家者である比丘、比丘尼と在家者である優婆塞、優婆夷の四衆であった。在家信者による布施によって修行者たちは露命をつないで、悟りを求めたのであり、絶対に行者自身で自給自足をしていたのではない。禅において、作務（さむ）という概念が成立したのは、中国仏教からである。原始仏教において修行者は田を耕すことも、食事を調料することも禁止されていたのであり、彼ら

にとって在家信者による布施は不可欠な生命維持の手段であった。これは裏をかえせば、修行者は在家信者と、大小の差はあれ、深い絆をもっていたのである。そこには、土俗的、迷信的な要素も多分にあったと思われる。仏教を表層部と基層部に二分するならば、教理は前者にあたり、土俗的、迷信的なものは後者にあたるであろう。仏教は元来、その基層部を無視し、排斥することなく、空間的、時間的変遷とともにそのスタイルを変えてきたのである。この考えを、いまヨーロッパ仏教に適用するならば、「どれほど在家信者の心をつかむか」ということが、一番大きな課題となることは間違いない。そのためには、ヨーロッパの習俗に適合することが一番早道のようである。しかし、日本のように祖先崇拝といった土俗的風習は、他の宗教、土俗的信仰を認めなかったキリスト教によって根絶やしにされてしまっている。それ故、これは無駄な考え方であろう。それよりもむしろ、時間はかかるが、彼らの知性に訴える方法のほうが、より適当と思われる。そのためには、

一、より多くの翻訳とその普及

一、指導者の養成と布教活動の充実

この二点が急務であるように思われる。南方上座仏教の内容は、早くからPTSによる原典出版とその翻訳により、知識人たちの興味をひいてきた。その結果は、南方上座仏教が他の二者を引き離して盛んであるということに現れている。今後、これらの三者の仏教がどれほど、さきの二点に力を注ぐかによって、ヨーロッパ仏教のスタイルが決定されてくるであろう。日本の禅について言わせてもらうならば、弟子丸泰仙老師以後、燎原の火の如くひろがった、禅の信仰者、修行者たちの求道心を絶やさないためにも、この二点の活動を絶対に欠如させてはいけない。